現場実証を中心とした鳥獣害対策の取組

■　水稲・果樹等農業者　■

（小豆農業改良普及センター　○米澤晃子　三木洋）

●対象地域の概要

小豆管内の主な農作物は、水稲92ｈａ、オリーブ144ｈａ、カンキツ類70ｈａ、イチゴ4ｈａなどである。耕地面積は狭いものの、中山、肥土山地区の傾斜地には棚田が広がり、農村歌舞伎や虫送りなど、農村の伝統的な文化が守られている。

しかし、高齢化や担い手不足、近年では鳥獣被害により耕作意欲が失われる等、条件の不利な農地では耕作放棄地も増加している。

●課題を取り上げた理由

小豆管内では、平成20年頃から、シカ・サルに加え、イノシシや特定外来生物のヌートリアなど、新たな獣種による農作物被害が発生している。対策として、集落柵や個別の侵入防止柵の設置、わなによる捕獲等が進められており、農作物の被害金額は平成25年度をピークに減少傾向を示している。しかし、柵の設置方法が適切でなかったり、設置後の点検・補修ができていない場合など、効果が不十分なケースも見受けられる。また、獣種が不明であったり、対策について知見が少なく、対応に苦慮している場合もある。

そこで、講習会等を通じて鳥獣の生態や対策を理解してもらい、現場の課題解決のための展示ほを設置し効果を確認するなど、適切な対策を支援した。

●普及活動の経過

1　侵入防止柵設置希望者への支援

町担当者と連携し、補助事業を活用して、できるだけ複数の農家で、隣接した農地を効率的に柵で囲うよう働きかけた。また、ワイヤーメッシュ柵と電気柵の特徴や、設置方法及び設置後の管理について説明し、現地ほ場を確認した上でより適した柵を選択してもらうよう助言した。

2　実証ほの設置

侵入防止柵（電気）の適切な設置方法と管理を理解し、効果を実感してもらうため、前年イノシシによる被害（全倒伏、収穫皆無）が発生した水田（約50ａ）において電気柵を設置した。農家には、事前に電気柵の仕組みを説明し、柵線が雑草に接触しないよう定期的に除草するよう指導した。設置後は直ちに通電を開始し、センサーカメラを設置してほ場に近づく鳥獣を観察した。

電気柵の設置作業

また、水田で、カモ類やサギ類が移植後の苗を踏み込む被害が発生したため、鳥よけとして幟（ダンポールに黒マルチを取り付け）を設置した。麦ほ場では、播種後、カラスが籾や発芽後の新芽を食害する被害が発生していたため、「畑作テグス君」を設置した。

3　センサーカメラを活用した鳥獣対策

オリーブ、カンキツ、モモ等の園地において、果実の食害や、枝を折られたりする被害が発生したが、加害獣種が不明のため対策が立てられないケースがあった。また、効率的に捕獲するため、ほ場への侵入か所を絞り込む必要があった。そこで、センサーカメラで獣種と侵入か所を特定し、被害防止対策を支援した。

4　鳥獣対策講習会の実施

水稲農家を中心に講習会を実施し、現場での優良事例や失敗事例、実証ほの結果、動画などを交えながら分かりやすく説明した。また、環

境整備・侵入防止・捕獲等の総合的な対策が大切であることや、一人一人ができることから取り組んでいくよう指導した。

水稲栽培者向けの講習会

●普及活動の成果

1　県の鳥獣捕獲等助成事業を活用した侵入防止柵の設置は、令和2年度は土庄町が18件（受益戸数23）、小豆島町が18件（受益戸数54）であった。また、できるだけ受益者同士のほ場をまとめて効果的に囲い、柵の設置作業も共同で効率的に実施した。

2　実証ほとして電気柵を設置した水田において、柵設置前は頻繁にイノシシの侵入がみられていたが、設置後は侵入がみられず、被害の発生はなかった。定期的に除草を行う手間があるものの、農家からは、「電気柵は思ったより設置が簡単で、効果が高い」との好評価を得た。

実りの秋、電気柵の効果を実感

水鳥対策の幟は、カルガモに対しては水田への侵入防止効果が認められたが、シラサギは侵入がみられたことから、鳥の種類に対応した対策が必要であることが推察された。

カラスに対し、テグスは効果が高かったが、バードガードは効果が認められなかった。

3　センサーカメラの活用では、オリーブ園地で枝折れの被害が発生し、当初シカが疑われたが、映像からイノシシによることが判明した。また、園地への侵入か所を特定し、わなを設置したことで、効率的な捕獲につながった。

カンキツの果実被害が発生している園地では、タヌキがワイヤーメッシュの目合いをすり抜けて侵入していることが分かり、網などで補強するよう助言した。

ワイヤーメッシュを通過するタヌキ

4　講習会等を通じ、鳥獣被害防止対策への理解が深まった。また、現場の意見・要望を聞く機会ともなり、水稲ではスズメの被害に苦慮していることが分かり、新たな課題として対策を検討していくことにした。

●今後の普及活動の課題

鳥獣被害は減少傾向にあるが、依然として柵の設置・管理が不適切なケースがあり、十分な効果が得られないほ場も散見されることから、引き続き適切な対策を支援する。また、捕獲個体の有効活用についても、ペットフード化の取組みを継続するとともに、観光地としてジビエへの活用を検討する。

今後も、農家や関係機関と連携し情報収集を行うとともに、新たな課題については、実証ほを設けるなどして解決を図り、講習会などを通じて広く周知する予定である。